

## あれこれたまご

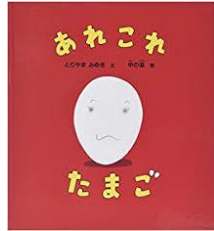
とりやまみゆき／文中の滋／絵  
福音館書店（2007.5）

スーパーに陳列している、たまごのおしゃべりから始まる生活絵本です。たまごのユニークな顔や会話で構成されています。

おしゃべりなたまごたちは、大阪弁で「あのひとにやったら こうしてほしいなあ おりょうりじょうずみたいやもん」「あのかわいいあかちゃんちにも いきたいわあ」「あれになりたい、これになりたい。おいしい おりょうりになりたいねん」と夢いっばいです。

すべて、たまごの目線で描かれていて、ホットケーキに変身する様子やマヨネーズになる様子を分かりやすい絵とともに、実況中継しています。

何に変身しても満足そうな、たまごたち。読んだ後には、たまご料理が作りたくなる絵本です。



## いちにちおもちゃ

ふくべあきひろ／作 かわしまななえ／絵  
PHP研究所（2009.7）

表紙には「いちにちおもちゃ」のタスキを掛けた男の子。

「おもちゃって、たのしそうだな。よし、いちにちおもちゃになってみよう。」という言葉通り、男の子がいろいろなおもちゃに変身するという絵本です。

いちにちくれよん。顔が痛いよ…。いちにちコマ。目が回って、気持ちが悪い…。他にもぬりえにつみきなど。

普段、何げなく遊んでいるおもちゃだけど、実際おもちゃになってみると意外と大変…。だから、遊んだ後はちゃんとお片付けしなくちゃと、作者が後片付けの苦手な息子さんのためにこの絵本を作ったそうです。

楽しい擬音と男の子のリアルな表情がユニーク。大人から子どもまで想像力がかき立てられるナンセンス絵本です。「いちにち」シリーズは、他にも4冊あります。



## エイモスさんがかぜをひくと

フィリップ・C・ステッド／文  
エリン・E・ステッド／絵 青山南／訳  
光村教育図書（2010.7）

子どもにとって、風邪をひいて一人で寝ているのは心細いもの。そんな時にこんな絵本はいかがでしょうか。

動物園で働くエイモスさんは、毎日、忙しい仕事の合間をぬって、お友達の動物たちと過ごす時間をとても大切にしています。ソウとチェスをし、カメとはかけっこ…ペンギン、サイ、ミミズくと、それぞれに最適の方法で、そっと寄り添うエイモスさん。動物たちも彼との時間をとても楽しみにしています。

ところがある日、エイモスさんは風邪をひいて仕事を休みすることに。心配でいてもたってもいられなくなった動物たちは、エイモスさんに会いに出かけます。

バス停に並ぶ姿、お行儀よくバスに乗る様子…木版画と繊細な鉛筆画で表情豊かに描かれた動物たちに心が和みます。

大切な人を思う、優しい気持ちにあふれた絵本です。



## おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん

長谷川義史／作  
BL出版（2000.7）

5歳の男の子の素朴な疑問から始まるお話です。

「おじいちゃんのおとうさんは、どんなひと？」とおじいちゃんに聞くと、ひいおじいちゃんといひいひいおじいちゃんのことを教えてくれました。

さらに気になるのは「ひいひいおじいちゃんのおとうさんは、どんなひと？」ということ。江戸時代、原始時代…どんな時代をさかのぼって絵本の最後は、どんな人になるのでしょうか。

次の展開が分かっているけど聞きたくなる、自分のルーツを知りたいと思う絵本です。

ページいっぱい埋め尽くされた文字とパワフルで味のある絵が、時代の移り変わりや人間の進化と退化を分かりやすく伝えていきます。



## おっきょちゃんとかっぱ

長谷川摂子／文 降矢奈々／絵  
福音館書店（1997.8）

川辺で遊んでいた小さな女の子がかっぱに誘われ、水底の祭りに出かけます。

女の子の名前はきよ、おっきょちゃんです。水の中に入り、取り囲むかっぱたちにお土産のキュウリを差し出すと、大好きなキュウリを見たかっぱたちは、おっきょちゃんを温かく迎えます。



それから、祭りの餅を食べたおっきょちゃんは、水の外のことを全部忘れてしまいます。ところが、ある日川面を流れる自分の人形を見つけてお母さんのことを思い出し…。

“ちえのすいこさま”の登場や謎めいた“すいかごめのじゅもん”に、水彩絵具で描かれた揺らめくような挿絵が相まって、水の中の幻想的な世界が鮮やかに目の前に広がります。

おっきょちゃんと一緒になって、この不思議な夏の出来事を体験してみませんか。

## おなべおなべにえたかな？

こいでやすこ／作  
福音館書店（1997.8）

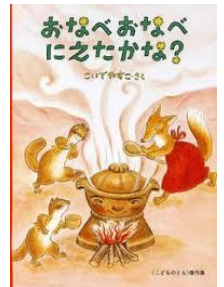
ある春の日、きつねのきっちはタンポポを摘んで山向こうのおおばあちゃんのところへ行きます。途中に出会った、いたちのちいともいも一緒です。

ところが、おおばあちゃんは母さんカラスに頼まれて子カラスのけがの手当てに出掛けることになりました。ちよ

うどスープを煮ていたおおばあちゃんは、きっちたちにスープの番をまかせます。「おなべおなべにえたかな？」「にえたか どうだか たべてみよう」きっちたちとおなべの掛け合いや、みんなで味見と味付けを繰り返す様子、スープを煮続けるおなべの表情がなんととも愉快です。

最後にみんなで味わうスープの出来映えは、絵本を読んでものお楽しみ！

ページをめくると、春の草花やスープの芳しい香りが広がるような季節感いっぱい1冊です。



## おふろだいすき

松岡享子／作 林明子／絵  
福音館書店（1982.4）

「ぼく」がいつものようにおもちゃの「ブッカ」と一緒にお風呂に入ると、ブッカからお風呂の底に大きなカメがいることを聞く。するとカメ、双子のペンギン、オットセイ、カバ、最後に大きなクジラが次々と現れる。みんな湯船につかり、順番に50まで数を数えていると、お母さんがお風呂場をのぞく。その途端、クジラもカバも他の動物たちもみんなお湯にもぐって隠れてしまう。



日常生活の中から異世界へ入るという手法は、物語でよく用いられます。この絵本も狭いはずのお風呂場に、大きな動物たちがリレーのように現れるというファンタジー作品です。

お風呂のほっこり感が漂うような黄色をベースとした色使いと、表情豊かな動物の絵から、本当にこんなことが起こるかもと期待を寄せてしまいそうです。

## からすのパンやさん

かこさとし／作・絵  
偕成社（1973.9）

「からすのまち、いずみがもりに「からすのパンやさん」がありました。大切な4羽の赤ちゃんカラスのために一生懸命働くお父さんとお母さんですが、赤ちゃんが泣き出すと飛んでいって、あやしったりおっぱいを飲ませたりと大忙しです。



そんなある日、4羽のカラスがおやつに焦げたパンを食べていると…。

“きつねパン”、“ピアノパン”など色や形の違う何十種類ものパンが、見開きページいっぱいに描かれており、思わず絵本の中に引きつけられます。また、あちこちに登場するカラスたちの、個性的で豊かな表情を比べて見るのも楽しいですよ。

2013年には、シリーズとして40年ぶりに、大きくなった4羽のカラスが大活躍する「からすのやおやさん」など、4巻が出版されています。

## かわいいサルマ

ニキ・ダリー／作 さくまゆみこ／訳  
光村教育図書（2008.1）

大好きなおばあちゃんに、おつかいを頼まれたサルマは、スカーフ、ソタマ（腰巻き）、サンダル…とおしゃれな姿に大変身。「まっすぐいって、まっすぐかえるんだよ。しらないだれかとおしゃべりしちゃだめよ」というおばあちゃんの言い付けを忘れて、歌いながら歩いていると、声をかけてきた犬にうまくだまされ、すべてを取り上げられてしまいました。



怖くなったサルマは、おじいちゃんの所へ助けを求めに行きました。そこで二人の取った作戦は…。

ユーモラスで色彩豊かな絵から、アフリカの人々の生活や文化が分かります。また、サルマや犬のさまざまな表情が、この絵本の楽しさや切なさをより一層醸し出しています。

## きょうはなんのひ？

瀬田貞二／作 林明子／絵  
福音館書店（1979.8）

「おかあさん、きょうはなんのひだか、しってるの？しらないの、しらないの、しらないの、しらないの、しらないの、しらないの」という歌を歌って、学校へ行ったまみこ。お母さんは、階段で手紙を見つめます。そこには、次の手紙の隠し場所が書いてありました。



家中いろいろな所に隠された手紙は全部で10通。次はどこかな、手紙に込められたメッセージは？宝探しのような展開や謎解きに読み手もワクワクしてきます。

両親の喜ぶ姿を見つめるまみこの表情が豊かで、大好きな人が喜んでくれることのうれしさが伝わってきます。表紙から裏表紙に至るまで物語があり、絵の持つ力を感じさせられます。

文章が多く、謎解きの内容もやや難しいので、対象年齢は少し高くてもいいでしょう。

## これは のみのびこ

谷川俊太郎／作 和田誠／絵  
サンリード（1985.9）

表紙の手が指さす先には小さな点。これが「びこ」です。

「これは のみのびこ」「これは のみのびこの すんでいるねこの ごえもん」「これは のみのびこの すんでいるねこの ごえもんの しっぽふんずけた あきらくん」「これは…」とページが進むごとに言葉が付け加えられていく、言葉遊びの絵本。



手書き風の文字と、ほのぼのとしたユニークな絵が軽快な言葉のリズムにぴったりで、言葉が増えるとともに「次はどうなるの？」と、子どもたちの想像も膨らみます。

ページ左側が文、右側が絵の構成で、次々と連なる言葉がページを埋め尽くす頃には、もはやそれは呪文のよう。ゆっくり読んだり、早口で読んだり…子どもたちと一緒に、声に出して楽しんでみてください。

## さむがりやのサンタ

レイモンド・ブリッグズ／作・絵  
すがはらひろくに／訳  
福音館書店（1974.10）

クリスマスイブの朝、常夏のビーチでくつろいでいる夢を見ていたサンタは、目覚まし時計の音で目を覚まします。「やれやれ、またクリスマスか！」とつぶやきながら、トナカイに餌をあげ、朝ご飯を済ませると、いよいよプレゼント配りに出発です。



ところが、さむがりやのこのサンタは、吹雪にぼやき、雨にぼやき、煙突に嫌気が差すという、今までのサンタのイメージが変わってしまうようなことばかり言います。

でも、そんなサンタが身近に感じられ愛着がわくのは、日常生活の様子が1コマずつ分かりやすく描かれているからでしょう。

何度もページをめくる楽しさの詰まった、古くから読み継がれている絵本です。



**サンタクロースはおもちゃはかせ**

マーラ・フレイジー／作  
うぶかたよりこ／訳  
文溪堂（2006.10）

サンタクロースはなぜ、子どもの欲しい物が分かるのでしょうか？それは、サンタ・テレビジョンがあるから。子どものこと、おもちゃのこと、プレゼントのことなら何でも知っている博士、それがサンタクロースなのです。



子どもたちの声に耳を傾けて、すてきなおもちゃを探し、楽しく遊べるか確かめたら、それぞれの子どもに合ったプレゼントを選んでラッピング…1年がかりで丁寧に準備をするサンタの様子が、短い文章と細かい絵で綴られます。

子どもたちへの思いに溢れたその姿は、一生懸命でほほ笑ましく、でもどこかコミカル。倉庫に並ぶたくさんのおもちゃや、色とりどりにラッピングされたプレゼントにもワクワクすること間違いなしで、見ているだけで幸せな気持ちになれる1冊です。

**ソルビムーお正月の晴れ着ー**

**ソルビム2ーお正月の晴れ着（男の子編）**  
ペ・ヒョンジュ／絵 ピョン・キジャ／訳  
セーラー出版（2007）

「お正月、新しい年、新しい気持ちに新しい晴れ着、オンマが作ってくれたチマ・チョゴリを着るの」



韓国・朝鮮ではお正月になると身に付けるものを新調する風習があり、その晴れ着を「ソルビム」といいます。この絵本ではソルビムを足袋から帽子まで、女の子が一人で身支度を整える様子を丁寧に描いています。同様に「ソルビム2」は男の子編になります。

細やかな絵柄と美しい色彩、特に赤や青など原色が印象的なこの作品には、言葉の注釈と巻末に解説があり、伝統や風習を広く伝えようという意識が感じられます。小さな子どもならではの目線でソルビムを身に付ける喜びと、また、お正月らしいピンと張りつめた冷たい空気の中、新しい年を迎える喜びが感じられる作品です。

**ハリーのセーター**

ジーン・ジオン／文  
マーガレット・プロイ・グレアム／絵  
わたなべしげお／訳  
福音館書店（1983.5）

黒いぶちのある白い犬のハリーに、おばあちゃんからバラの模様のセーターが届きました。気に入らないハリーは、いろいろな場所ですててやろうと試みるのですが、親切な人たちが拾ってくれます。



落ち込むハリーは、セーターからほつれている毛糸を見つけます。それを見ていた小鳥があっという間に毛糸をくわえ、空高く飛んでいきました。セーターはみるみるほどけ、ハリーが着ていたセーターはなくなってしまいました。

犬のハリーが活躍する創作絵本です。表情豊かに描かれているハリーは人間味にあふれ、読者はハリーに気持ちを重ねます。ハリーのセーターが思わぬ形で役立ったことなど、明確な起承転結のある物語に読後感がよい作品です。

**ハンダのびっくりプレゼント**

アイリーン・ブラウン／作  
福本友美子／訳  
光村教育図書（2006.4）

ハンダは友達のアケヨへのプレゼントに7種類の果物をかごに入れ、頭の上のせて運びます。ところがその道中、サルがバナナを、ダチョウがグアバをと次々に動物たちがかごから果物を取っていきます。ハンダはまったく気がつきません。さて、アケヨに果物を無事に届けられるでしょうか。



繰り返しが楽しいアフリカケニアのおはなしです。単純な展開ながら、いきいきとした動物たちやつやつやした果物など、素朴な絵と色彩が物語に力を与えます。何より読者は、果物がなくなっていく様子をハラハラしながら見ることでしょ。

表紙から見返し、裏表紙に至るまで、アフリカ文化が感じられる楽しい1冊です。

**ペレのあたらしいふく**

エルサ・ベスコフ／作・絵  
おのでらゆりこ／訳  
福音館書店（1976.2）

少年ペレは子羊を1匹飼っていました。その子羊が大きくなるにつれ、ペレも成長しましたが、着ている服はどんどん小さくなっていきました。



ある日ペレは、子羊の毛を刈り取って、おばあさんにその毛をすいてくれるようお願いしますが、その代わりに草取りを頼まれます。次にその毛を持って別のおばあさんのところで糸を紡いでもらいますが、その代わりに牛の番をします。その次はペンキ屋さん…。

子羊の毛からたくさんの人の手によってペレの服が出来上がっていく過程が、ゆったりとした田園風景の中にいきいきと描かれています。

最終ページにある、自分のがんばりで服を仕上げたペレの満足げな表情とそれを取り囲む人々の笑顔がとても印象的な、今も読み継がれているスウェーデンの絵本です。

**ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ**

マーガレット・ワイス・ブラウン／作  
坪井郁美／文 林明子／絵  
ペンギン社（1984.11）

おばあちゃんからの電話で、家へお招きされる男の子は、自宅の前の道をひたすらまっすぐ行くように、どの家か迷うなら窓からのぞくようにと教わります。



分かりやすいはずの道をまっすぐに進む男の子は、道端のお花や蝶にドキドキします。なぜか浅い川、小さな丘に出ても工夫しながらまっすぐ通り抜けます。行き当たった建物をのぞくと、そこには大きな馬がいました。さて、おばあちゃんの家はどこでしょう。

男の子のつぶやきで構成された文章が、一人で出かける緊張感を引きだてます。また、やわらかな色彩の光あふれるような絵からは、美しい風景の中の主人公の気持ちが伝わってきます。

幼い読者は主人公に気持ちを重ね、最後にはほっと笑顔の広がる絵本です。

**ぼちぼちいこか**

マイク・セイラー／作 バート・グロスマン／絵  
いまえよしとも／訳  
偕成社（1986.6）

「ぼく、しょうぼうしになれるやろか」「なれへんかったわ」「ふなのりは、どうやろか」「どうもこうもあらへん」

**ぼちぼちいこか**



他にもいろいろな仕事に挑戦するカバくんですが、大きくて重たい体が災いして、どれもうまくいきません。失敗してもくじけることなく、常に前向きなカバくんに元気をもらえます。

繰り返しが楽しく、エア・ブラシで描かれたカバくんの愛嬌のあるユニークな表情、関西弁の訳と間が笑いを誘います。そして、「そや。ええことおもいつくまで一こらでちよっとひとやすみ」「ま、ぼちぼちいこかーということや」と、単に面白いだけでなく、時には立ち止まってゆっくり考えてみることも、大切だと教えてくれる絵本です。

**まあちゃんのながいかみ**

たかどのほうこ／作  
福音館書店（1995.8）

まあちゃんはおっぱ頭の女の子。髪の長い友達がちょっぴりうらやましくて、思わず「あたしなんかね、もっとうんと のばすんだから」と宣言してしまいます。



まあちゃんのみざす長さといったら…おさげにして橋の上から魚釣りができたり、投げ縄にして牛を捕まえたり、洗濯ロープの代わりになったりするほど。シャンプーやお手入れも、楽しい秘策で難なくクリアの予定です。

友達との会話の場面はモノクロで、まあちゃんの想像の世界は色とりどりに描かれていて、読み手の女の子はまあちゃんと一緒に思わずうっとり。男の子もその奇想天外な思いつきに、目を見張ることでしょう。

楽しい想像がどんどん膨らんで、子どもたちを夢中にさせること間違いなしの1冊です。

## まほうの夏

藤原一枝・はたこうしろう／作  
はたこうしろう／絵  
岩崎書店（2002.5）

お父さんもお母さんも仕事で忙しく、弟と2人退屈な夏休み。そこへ届いた1通のはがき、それは「まほうの夏」への招待状でした。

おじさんが招いてくれた田舎は、毎日がワクワクの連続。兄弟だけでのお泊りの緊張感もなんのその！虫捕り、川遊び、海水浴に魚釣り…元気いっぱい遊び回る2人の姿に、読み手の子も自分自身を重ね、一緒にまほうの夏を過ごすはず。懐かしい思いに浸りながら読む大人の人も多いことでしょう。

鮮やかな森の緑や真っ青な空と海、田舎の街並みやそこに住む人々の温かさ、そしてその中で日に日にたくましくなっていく主人公兄弟の様子を、透明水彩を用いた優しい絵でいきいきと描いています。真っ黒に日焼けした2人の満足そうな笑顔に、夏休みが待ち遠しくなる1冊です。



## まゆとおに

富安陽子／文 降矢なな／絵  
福音館書店（2004.3）

ある日、やまんばの娘のまゆは、雑木林で大きな人に出会います。頭のとっぺんにある「つ」をたんこぶだと思ったまゆには、それが鬼だということが分かりません。おなかのすいていた鬼は、まゆを大鍋で煮て食べてやろうと家に誘います。

鬼の悪たくみとは裏腹に、次から次へと鬼をびっくりさせるまゆの豪快な行動と、鬼とのやりとりで物語が展開していきます。まゆの怪力に驚き、徐々におびえる鬼の表情やしぐさが色彩豊かに描かれることで、まゆの無邪気さが強調されており、物語におかしみを与えます。

すっきりする読後も魅力的なこのシリーズは、絵本の他に、「やまんば山のモッコたち」という幼年向け童話も人気があります。



## ロバのシルベスターとまほうの小石

ウィリアム・スタイグ／作  
せたていじ／訳  
評論社（2006.2）

ロバのシルベスターは、小石を集めることが好きでした。ある日、燃えるような赤い小石を拾ったシルベスターは、石の力に気づきます。それは、魔法の小石でした。しかし、ライオンに出くわしたシルベスターは、思わず自分を「岩」に変えてしまいました。岩は、小石を持つことができません。一緒に暮らしていたシルベスターの両親も、息子の行方不明に嘆き悲しみます。季節が変わっても、シルベスターは岩のままです。そして、諦めていたある日、奇跡が起こります。

文字の多い絵本ですが、場面を丁寧に表現する絵と、美しい日本語から物語の切なさが感じられます。最後に望みがかなう結末は、5・6歳頃から、共感できるでしょう。絵本から物語への移行期にも向いている作品です。



## 《編集委員のつぶやき》

小学校6年生の娘と年長の息子がいます。絵本と一緒に読んで、親子でふれあう時間を…とは思っていますが、毎日ドタバタしていて、時間にも心にも余裕のない日々を過ごしています。それでも「きょうはなんのひ？」(福音館書店)を読んだ後の結婚記念日に、当時年長だった娘がたどたどしい字で書いた手紙をくれたことや、おひざに抱っこで「三びきのやぎのがらがらどん」(福音館書店)を読んでいたのが、最後には私の背中越しに恐る恐る絵本を見ていた息子の表情など、絵本を通してその頃の子どもの様子がいろいろと思い出され、懐かしく幸せな気持ちになります。そんな思い出に残る1冊、お気に入りの1冊がこの冊子の中から見つかると思います。